

LASA 第19回国際大会

石 井 章

(中南米総合研究プロジェクト・チーム)

LASA (Latin American Studies Association) は米国に本拠をおく世界最大規模のラテンアメリカ地域研究学会である。米国をはじめとしてラテンアメリカ、カナダ、ヨーロッパの各国の研究者が加盟している。日本からも100名を超えるラテンアメリカ研究者がLASAの会員となっている。ほぼ1年半ごとに国際大会が開催される。第19回国際大会は本年9月28日から30日までの3日間、ワシントンDCのダウントウンのシェラトン・ホテルで開かれた。

全部で555にも上る数のセッションが、朝8時から夕方5時45分までの時間帯に1日5こま、3日間ぎっしり詰め込まれている。これらのセッションは研究分野、対象地域によって15のグループに分類されている。地域はメキシコ、カリブ、中米、南米の4分類、分野は農業問題と先住民グループ、民主主義と人権、経済と開発、環境、ジェンダー、政治、歴史、労働問題、文学・芸術、米州における国際問題といったもので、この他に地域、分野の両方にまたがるものとして、米国内のラティーノ（ラテン系住民）というのがある。

分野別では文学・芸術が最も多いが、3年前の第17回ロサンゼルス大会の時と比べてジェンダー、民主主義と人権といった分野が増えたのが目立った。とくにジェンダーに関するセッション数が55とほぼ10に1つを占めたのは特筆される。

地域別ではメキシコ40、カリブ31、中米27に対して南米が16という少なさである。これは本学会が米国に本拠をおき、大会参加者は米国人が多数を占めるといふ事情を反映している。米国との関係が深く、米国にとって関心の高い地域に研究が集中するのは当然といえよう。またはじめの3地域から米国への移住者が多

いことも関係している。

メキシコが最も多いのは当然として、中米とカリブでは3年前と比べて両者の関係は逆転した。中米地域紛争の時代には、LASAの会議でも中米に対する関心が異常に高く、必ずしもアカデミックとはいえない次元でのクリティカルな発言が目立ったが、今は落ち着いた。カリブ関係の31のセッションのうち10がキューバに関するものであることは最近の関心の傾向を示すものであろう。

筆者は農業問題と先住民グループ、メキシコ、中米に関するセッションのいくつかに出席した。農業問題に関しては、最近の農業部門の民営化、非集団化の傾向を論じたもの、メキシコのチアスパス蜂起に関しては、中米のゲリラ運動と比較してEZLN (Ejército Zapatista de Liberación Nacional: サパティスタ人民解放軍) の特徴を論じたもの等があった。

日本ラテンアメリカ学会は、前回のアトランタ大会(1994年3月)以来LASAと提携して、日本＝ラテンアメリカ関係に関するセッションを一つ開催している。今回はグスタボ・アンドラーデ(上智大学)、ピーター・スミス(UCサンディエゴ校)両氏のco-chairにより、“NAFTA, WHFTA (Western Hemisphere Free Trade Area) and the Pacific Rim”というセッションを開き、日本から西島章次氏(神戸大学)が報告を行なった。この他に個人として田中高氏(中部大学)が「1950年代以後の中米＝日本間の綿貿易」について報告を行なった。

次回大会は1997年4月17～19日にメキシコのグアダハラで開催が予定されている。